フォーラムニュース　Vol.17　2020　9/10

発行：フォーラム･子どもたちの未来のために実行委員会

http://www.f-kodomotachinomirai.com/

文責／大竹永介

【連載企画】コロナの時代の子どもたちへ

子どもたちの生命力を私は信じる

小手鞠るい

16 号で掲載した角野栄子さんからのメッセージは大きな反響を呼びました。私たちがこれまで経験したことのない時代を生きる子どもたちに向けて、今月はニューヨーク郊外の森の中で精力的な執筆活動を続けられている作家の小手鞠るいさん（写真）からです。（編集部）

「アメリカは大変そうですね」

最近、事あるごとにそう訊かれる。

どう答えたらいいのか、戸惑ってしまう。

自宅で仕事をしている私のライフスタイルのせいでもあるけれど、私の暮らしているニューヨーク州の田舎町では、新型コロナウィルスの影響をほとんど感じない。

大都市であるマンハッタンからは観光客の姿が消え、代わりにホームレスの姿が目立つようになっているし、フロリダ州やテキサス州では、マスク装着を嫌がる人が多いせいで、感染拡大は止まらないという。ことほどさように「アメリカ」というのは多種多様で、ひと口で「これがアメリカ」と言い切ることはできない。

マンハッタン在住の日本人の友人によると、アメリカでコロナ問題がなかなか収束しない理由は、

「アメリカ人は総じて、日本人のように素直に命令に従うような国民じゃないから」

とのこと。一理あると、私も思う。

何しろ「マスクを掛けろ」と州知事から命令されたら、それは「人権侵害だ」と訴える人たち、「マスク法」を交付しても、それは「違憲行為だ」と主張する人たちの住んでいる国なのである。

ついこのあいだも、夫と登山に出かけていて、山道で人とすれ違いそうになったとき、私たちがマスクを取り出して掛けると、馬鹿にされ、揶揄された。

「ニューヨーカーっていうのは、屋外でも律儀にマスクを掛けるのか。滑稽だ」

　他州から来ていたと思われる人たちに対して、夫は怒った。

「このマスクは、我々のためじゃなくて、あなたのような人のために掛けている。それが礼儀というものだろう」

　学校の再開もどうなるのか、ぎりぎりになるまで、なんとも言えないようだ。町によって、学区によって、まちまちになるだろう。教師たちがみずからの感染を恐れて、新学期の再開を拒否している学校もあるという。

　とはいえ、もしも私が子ども時代に「学校へ行かなくていい」と言われたら、私は大喜びしただろうと思う。なぜなら私は学校が嫌いだったから。できれば行きたくないと思っていたから。友だちとべたべたするのも苦手だったし、遠足も運動会も文化祭なども大嫌いで、人との距離は常に遠く、あけておきたい性格だった。

　私の場合、当時の小・中学校に軍国主義的な教育制度の名残があり「気をつけ！　右へならえ！」の世界だったせいもあるかもしれない。学校で教わったことといえば「人と競争して勝て」ということだった。私の両親の場合には、学校では勉強はさせてもらえず「お国ために死ね！」だったわけである。また、私の大学生時代にはキャンパス内に学生運動の嵐が吹き荒れていて、授業もろくに受けられない年もあった。

　それでも私はなんとか（まともな）大人になることができた。

　子どもの力、言ってしまえば生命力というのは、たかがウィルスくらいで、損なわれるものではないのではないか。楽観的すぎるかもしれないけれど、私は、コロナ時代を生きる（かもしれない）子どもたちの未来を、決して憂えてはいない。

　むしろ、このできごとによって、人間至上主義、物質至上主義、なんでも便利で速いことだけがよしとされる価値観から解放され、自然の力、環境問題、地球のことや動植物のことなどに目を向ける子どもたちが増えてくれたらいいなと思っている。

　アメリカで暮らして二十八年になる。私が最も大きな危機を感じたのは、同時多発テロ事件のときだった。あれは人間が起こした事件だった。ウィルスと

は比べものにならないほど、怖かった。世界一の軍事力を持つ、戦争大国アメリカで暮らしている私は、ウィルスよりも戦争の方が何倍も恐ろしい。

怖いのは人間であり、怖いのは、間違った教育である。

日本の子どもたちは、幾多の地震や天災を乗り越えて、きょうも果敢に生きている。ウィルスなどに負けはしない。私はそう信じている。

（2020 年 8 月 24 日）

【こでまりるい：1956 年生まれ。岡山県出身。同志社大学法学部卒。主な作品に「欲しいのは、あなただけ」（島清恋愛文学賞）「炎の来歴」「ある晴れた夏の朝」（小学館児童出版文化賞）など多数。新刊に「ぼくたちの緑の星」（童心社・写真）がある。ニューヨーク州ウッドストック在住】

【予告】「コロナの時代の子どもたちへ」、次号はあさのあつこさん、次々号は武田美穂さんが登場の予定です。ご期待ください！

～～～

児童文学の創造と普及」に集約されており、以来、表現の自由や平和の問題についても会として取り上げ、様々に発信していくということに努めてきました。

一つだけ例を挙げると、かなり前のことにはなりますが、1980 年代の初頭に、自民党の機関紙『自由新報』などを舞台に、小学校国語教科書の文学教材に対する「偏向」キャンペーンが行われたことがありました。特に共通教材の「おおきなかぶ」「かさこじぞう」がターゲットになり、最大の採択率を持つ光村図書が、この二つの作品を降ろすことを検討しているという報道がなされました。ちょうど総会の直前だったので、急遽抗議声明を発表し、教科書の編集委員、文学教材の作者、画家に呼びかけました。半月ほどの間に百数十人の賛同が集まり、この時の抗議声明は、「こういう不当な理由で作品が差し替えられるならば、我々は教科書への執筆を拒否する」という強いものでした。この結果、光村図書は作品差し替えを断念、他社も含め、今もこれらの作品が掲載されているのは、この時の運動の賜物と言えます。

僕はこの時、小学校教員を辞して協会事務局に勤めて間もない頃でしたが、事態が一段落した後にある新聞記者が、「自分たちはどんなにおかしいと思っても“おかしい”と書くことはできない。だけれども、あなた方当事者が“おかしい”と声をあげてくれれば、それを書くことはできるのです」と述懐していたのがとても印象に残っています。

【協会の活動について】

〇機関誌『日本児童文学』の発行～協会創立の 1946 年に創刊され、児童文学の総合誌として貴重な役割を果たしてきました。現在は隔月刊で、小峰書店が発売元になっています。

〇講座や研究会など～児童文学学校、創作教室、実作通信講座といった講座を開設しています。また、秋には様々なテーマを設定した公開研究会を、東京とそれ以外の地で、交互に開催しています。この他、会内の研究部、国際部、子どもと平和の委員会などが独自に企画した研究会も、随時行われています。

〇企画出版～ほぼ毎年、子ども向けのアンソロジーを１、２シリーズ発刊しています。また「現代児童文学論集」（全 5 巻）といった専門的な書籍も出版しており、現在会のこれまでの基本的な文書を収録した「創立 75 周年記念資料集」を準備中です。

〇文学賞とコンクール～例年、「日本児童文学者協会賞」「同 新人賞」「三越左千夫少年詩賞」を選考しています。また、新人の登竜門として、「長編新人

賞（小峰書店共催）」「子どものための感動ノンフィクション大賞（学研プラス共催）」「絵本テキスト大賞（童心社共催）」があり、さらに隔年で「児童文学評論新人賞」も募集し、各分野の新しい書き手を育ててきました。

〇その他の分野の活動～児童文学の著者団体として、他団体とも共同して、著作権に関わる取り組みや、また子どもの読書に関わる取り組みにも力を入れています。また国際部では、主にアジアの児童文学者との交流に目を向けています。

こんなふうに、およそ文学団体が取り組む活動のほぼ全部が活動の対象になっているようなところがあり、それは会として自負できることでもありますが、限られた体制のなかでは役員や事務局の負担が大きいという問題にもなるわけで、75 周年を迎えようとしている今、会の原点や歴史を見据えつつ、新しい時代にどう対応していくかが問われている時でもあると考えています。

たまたま先日、茨城放送ＦＭの「コネクト」という番組の「日本アソシエーツ図鑑」というコーナーに電話出演し、15 分ほど話をしました。最後に「今後どんなことに力を入れていきたいですか？」と聞かれ、とっさに「若い書き手を育てていきたい」と答えたのですが、そう答えながら、『やっぱり、そうだよな……』と、自分でうなずいたような次第でした。

（ふじたのぼる：児童文学評論家、日本児童文学者協会理事長、フォーラム実行委員）

●厳しい残暑とコロナ禍のなか、皆様にはいかがお過ごしでしょうか。「フォーラムニュース」17 号をお届けいたします。●相変わらず終息の気配の見えない新型コロナウィルス問題ですが、日々感染者の数が発表されるだけで、いったいどんな対策が取られているのか、今一つはっきりしない感じがしてなりません。●もともと「新型」だけにわからないことが多いのはやむを得ないとしても、最近では専門家の中でも正反対の意見があったりして、戸惑うばかりです。●そんな時に思うのは最近のこの国での「言葉の軽さ」です。隠蔽、捏造、改竄が横行し、だれも責任をとらないまますべてがごまかされていく。行きつく先は誰のいうことも信用できなくなるという荒涼としたモラルハザードです。現政権の罪深さはその「思想性」の右左にあるのではない、と思ってきた私ですが、首相の退陣表明によってすべて曖昧にされてしまうことだけは許されるべきではないでしょう。●私たちの活動も、この状況で、イベントが開催できないなど、大きな影響を被っています。唯一の情報発信がこのフォーラムニュース。読者の皆さんのご意見、ご感想、ご希望などをお知らせください。あて先は f.kodomo.mirai@gmail.com　（新たに配信ご希望の方及び配信停止をご希望の方もこちらまで）●次号は 10 月配信の予定です。どうぞ皆様お体にくれぐれもお気をつけてお過ごしください。（大竹）